まえがき

『〝我が子のため〟を手放すシンプル育児のすすめ』を手に取ってくださりありがとうございます。

平成6年に初めて親になった私は、後に5人の子育てに奮闘する日々を送ることになるとは思いもしませんでした。当時子どもが大好きというわけではないのに、結婚後には子どもを持つことが当たり前だと思い込み、周囲の期待に応えたいという思いから強く妊娠を望みました。

結婚から2年以上経って、ようやく1人目を妊娠したときには喜びと同時に安堵感があったことを今でも覚えています。

当時の私は、看護師として死と向きあうがん患者に関わる毎日を過ごしていました。「生き様が死に様」といわれるように死にゆく人の姿から、満足した死を迎えるためにどう生きるべきなのかという問いを持ち、ターミナルケアへの道へ進もうと考えはじめていました。

そんな最中に妊娠し、今度は人の生を身近に体験することになりました。

自分の意思とは関係なく自然に私の子宮の中で心臓が動きはじめ、徐々に人の形が作られ10カ月あまりで人が生まれてくることの不思議さを実感しました。月の満ち欠けに身体が反応するのを体感し、自分は見えない大きな力に支えられ生かされている、地球に住む生き物の一つだと改めて自覚しました。

大昔からこうやって人が命をつないできた時の流れを想像すると、生命を生み出すことは奇跡的なことで、自分がその一人となれたことに不思議な満足感と幸せを覚えました。

同時に、授かった命を、よりよい形で次の世代につないでいくという大きな役割を持ったことに気づきました。人がいい生き方をするとは、どのように生きることなのか、子どもにいい生き方を望むなら、自分はどのように子どもと関わっていけばいいのかを学びたいと思いはじめました。こうして育児に興味を持ち、自然と保育業界に身を置くことになっていました。

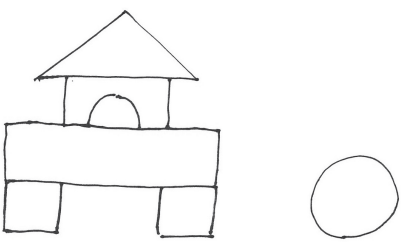
子どもの世界では不登校、引きこもり、うつ病、自殺、傷害・家庭内暴力といったことが問題となっています。10歳前後の子どもの心にすでに大きな黒い塊が詰め込まれ、苦しんでいるように見えます。

どんな子どもであっても、純粋な心の状態で生まれ人生がスタートしたはずです。

子どもがいい人生を踏み出すためには乳幼児期の育みが非常に重要だと考えています。

私が保育業界に転職したころ、ベテラン保育士たちが「最近子どもの姿が変わった」と口にするほど、子どもに変化が起きていて、子どもの将来に危機感を覚える人も出ていました。

運動能力の低下、小1プロブレム、学級崩壊、キレやすい子、発達障害児の増加などは保育課題のトピックとなっていました。障害児保育は法律が徐々に改定され、その対応に試行錯誤していました。乳幼児の子育ては専門家に託すのが普通かのような時代になり、国は待機児童をなくそうと一気に保育園を作り、専門家が不足した現場はあらゆる要求に応えるのに必死で乳幼児にゆとりを持って接することが困難な状況でした。誰のための保育園なのか、もはやわからない状況で、それは現在も変わりありません。子育てサービスが増え便利になってきたはずなのに、子どもの問題が解決に向かう様子は見られません。子どもの自殺数は、数年前に過去最高数を記録し、高止まりしたままです。子どもの世界が危機的な状態になっているとしか思えません。

令和になり大きく時代が変わりつつある今、育児の方向性が不透明な時代です。子どもたちの将来を幸せに導くために、私たち大人はどのような心構えで育児に取り組んでいけばいいのか見直す時期だと思います。人を生み育てることは実はもっとシンプルなことです。

私が経験した育児・保育を振り返り感じてきたこと、今感じていることをお伝えすることで、あなたのこれからの育児のヒントになれば嬉しいです。